イフタハー・シムシム

2001年６月に起きたある事件をきっかけに、80万人の中学生が登校しなくなった。やがて彼等はASUNAROと呼ばれるグループをインターネット上で作り、いろいろな活動を始める。たとえば、アジアの通貨混乱を利用して為替相場で巨額の富を稼ぐ。NHKの電波をジャックして「この国にはなんでもある。だが、希望だけがない」というメッセージを流す。そして北海道にイクスと呼ばれる電子通貨を流通させ、風力発電ですべてのエネルギーをまかなう独自の社会を作り始める。

読まれた方も多いと思うが、以上は村上龍氏の近未来小説「希望の国のエクソダス」（文藝春秋社2000年７月刊）のあら筋である。村上氏の「取材ノート」（同2000年９月刊）を読むと、インターネットやアジア経済の動向、中学生のものの考え方などについていろいろな人に意見を聞いていることがわかる。野村総合研究所の上席エコノミスト関志雄もアジア経済についての意見を提供している。こういった綿密な取材がこの突飛な物語にリアリティを与えている。ネットワーク時代の人間関係や組織のあり方、石油に頼ってきた20世紀型社会からの転換の方法などについて考えさせられるところが多い小説である。

この小説では2008年にASUNAROが目指す理想的な社会がほぼ完成することになる。それはクリーンで、ネットワークの下にみな平等な社会である。しかし平等であるがゆえに、富に対する欲望や地位に対する欲望がない「のっぺりとした社会」でもある。欲望が希薄であるということに違和感を覚えつつ、この近未来小説は終わる。

話は変わるが、ご存知の「アラビアンナイト（千夜一夜物語）」は今から1000年ほど前の10世紀に原型ができ、15～16世紀にほぼ完成したといわれている。その描く世界は先程のASUNAROの理想郷とは違って、色欲や金銭欲など欲望の渦巻く世界でもある。

この物語の中で最も良く知られている話の一つに「アリ・ババと40人の盗賊」がある。善良なアリ・ババは「開け、ごま」という呪文を知ることにより洞窟に隠された盗賊の財宝を手に入れ大金持ちになるが、欲深い兄のカシムは体を６つに裂かれて死んでしまう。

この話は、荒涼とした大地の下に目もくらむような財宝が隠されている、という砂漠に住む人々の願望を意味している、との解釈もあるようだ。そして驚くべきことに1000年後の20世紀にこの話は現実のものとなる。砂漠の下には石油という現代の財宝が隠されていたのである。アラブの国々は、そのおかげでアリ・ババのように大金持ちになった。ただし、この地下の宝庫の扉を開いたのは開けごまという呪文ではなく、リモートセンシング（遠隔探査）をはじめとする最先端の石油探査技術であった。

この小文のタイトル「イフタハー・シムシ

レポートに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。すべての内容は日本の著作権法及び国際条約により保護されています。
Copyright © 2001 Nomura Research Institute, Ltd. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ム」とはアラビア語で開けごまの意味である。シムシムがごまを意味するそうだ。しかし何故ごまがこの呪文に使われているのだろうか。アリ・ババの話にも「魔法の霊験に通じる神秘なごま」という表現が出てくるが、昔からごまには神秘な力があると信じられていたようだ。また、牛一頭とごま一粒を交換するというくらい高価なものでもあったようだ。

余談だが、テレビでお馴染みのセサミストリートは「ごま通り」という意味である。米国テキサス州の実業家ロイ・アンダーソン氏がごまビジネスで成功し、その利益で学校などの教育施設を寄付し、町のメインストリートをセサミストリートと名付けたのが、この子供向け教育番組の名前の由来だそうである。

このように霊験あらたかで富をもたらすごまであるが、現代ではさすがにその神通力は落ちてきたようである。では、現代のごまに相当するものは何であろうか。われわれの最大の宝である知恵や知識がインターネットを介して個人のものから人類のものとなり、なおかつそれらが今までにないスピードでネットワーク上で増殖しているという事実、さらには世界一の資産家がマイクロソフト社のビル・ゲイツ氏であることからも、IT（情報技術）やインターネットが現代のごまであるということに異論を唱える人は少ないであろう。

ポルトガルの詩人カモンエス（1524年頃～1580年）の「ここに陸尽き海始まる」の碑が立つロカ岬のすぐ南のテージョ川から、スペインやポルトガルの帆船が太西洋に向けて出航し、新大陸が発見された。ジェームズ・ワット（英国の機械技術者、1736年～1819年）の発明した蒸気機関は産業革命を引き起こし、やがて石油を燃料とする内燃機関に進化して、20世紀の石油文明へとつながる。そしてミレニアムの昨年、日本でもようやく政府がIT革命・IT立国と言い出した。

21世紀、地球上に未知の大陸はなく、石油資源も残りわずかとなった。われわれは海の向こうにフロンティアを見つけるのではなく、地中に眠る資源を掘り起こすのでもなく、人間自身の中にあるフロンティアを開拓し、人間自身の知恵を掘り起こす必要がある。そしてこれらを相互に結び付けて、より大きなフロンティア、より大きな知的資源にしていく必要がある。そのための道具がITでありネットワークであるが、村上龍氏が暗示するように、その実現に当たっては個人の知的財産に対する独占欲と、それを解放して共通の資源とすべきという社会正義とのバランスの問題など、大きな問題が山積している。

こんな問題にぶつかったら、現代の魔法の呪文「開け、IT」と言ってみよう。乗り越える勇気が湧いてくるかもしれない。でも何となくしっくりこないって？　では「イフタハー、IT」。これもイマイチ？　やはり「開け、ごま」と言ってゴマ化すしかないか。

（野村総合研究所　大野　健）

レポートに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。すべての内容は日本の著作権法及び国際条約により保護されています。
Copyright © 2001 Nomura Research Institute, Ltd. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.